大谷伯爵所藏　新疆史料解說

緒　言

玉門陽關の西汎く呼びて西域となす。張騫こゝに使して跡を史上に殘してより、漢土の史籍其興亡をしるして斷えず、連綿二千年之が史實を髣髴するもの、多くは漢書の恩澤に歸すべし。されど由來邊鄙の地、其傳ふるところの委曲に亘らざるや論なし。近時學者の努力は漸次之が缺漏を補ひ、新に史蹟の闡明せらるゝもの多きは、眞に學界の慶事なりとす。千八百九十年バワー氏（Bower）氏が庫車（Kutcha）にて得たる文書は、人をして此地方の史料採集に意を向はしむる動機なりき。次で土人の手によれる種々の發掘物が印度及び露西亞等に致され、更にヘディン（Hedin）氏の如き、グルムグルジマイロ氏（Groum-Groujimairo）の如き熱誠なる學者が、萬難を侵して此地方に學術的探險を試むるや、所々に埋藏せられたる遺跡は新たに紹介せられ、終に千九百年より翌年に亘る有名なるスタイン氏(Stein)の和闐（Khotan）附近の探檢となり、次いで千九百二年以來三回に及びて獨逸遠征隊の派遣となり、千九百六年より千九百八年に亘れる佛人ペリオ（Pelliot）氏の旅行となり、更にヘディン、スタイン諸氏の再三の探檢を見るに至りしが如き、英佛獨露の學者爭ふて此事に從事して、各々齎す處多く、其結果今や相ついで世に公けにせらる、大谷伯爵亦夙に意を中亞及び印度の史蹟に注ぎ、學界新たに此の如き風潮を生ずるや、